

学 位 論 文 題 名

ボランティア組織の自律性・独立性と継続可能性の考察

学位論文内容の要旨

これまで社会福祉の主な担い手は、公共部門であった。しかし、市場規模の縮小と急速に進行する少子高齢化は公共部門の問題対処能力の限界を露呈してしまった。対処策のひとつとして、市民によるボランティア活動に期待が集まっている。しかし、ボランティアな市民活動がどのような種類のサービスをどの程度提供でき、どのような意味で社会福祉の担い手となりうるのかは、いまだ明らかになっておらず、社会科学の大きな問題として残されている。

そこで本論文は、医療・福祉分野におけるボランティアの中から病院ボランティアを選んで主な対象とし、現代日本におけるボランティア組織の可能性を、その自律性および存続可能性に焦点を合わせ、社会学的視角から論じるものである。

上で述べたような問いに答えるため、本論文は、Pierre Bourdieu のハビトゥス論、資源動員論、フレーム分析、grievances 論を中心とした社会運動論、そして Erving Goffman の戦略論などの社会学理論を駆使し、ボランティア組織という研究対象に迫っている。そして 1999 年から 2010 年まで 10 年以上をかけて、様々な対象に面接調査そして／または参与観察といった社会調査を実施している。対象となったのは、ボランティア活動の基礎的分析のために北海道札幌市の断酒会と室蘭市のゴミ処理工場建設反対運動の関係者。そして病院ボランティア活動の分析のために、北海道札幌市、長野県長野市、長野県佐久市に所在する病院ボランティア参加者と病院の関係者である。

まず序章では、社会福祉制度の危機が叫ばれる中でボランティア組織を論じることの重要性が議論されている。議論の契機はボランティア動員論である。すなわち、ボランティアは国家や政府など「上からの動員」にすぎないという主張に対して、本論文はそれに疑義を唱える。そして、ボランティア活動およびボランティア組織の自律性および継続性を社会学的に考察するべきだという問題設定がなされている。

第 1 章では、誰がボランティア行為へと引き込まれていくのかが論じられている。ボランティア動員論では、ボランティアは国家や政府による動員の結果と解釈されている。虚偽意識やイデオロギー効果が人々をボランティア行為に駆り立てるのであると。しかし本章では、そのような動員論的な解釈とは別な論理でボランティア行為が生産される可能性が示されている。すなわち、「活動経験の蓄積」や「社会参加経験の蓄積」によりハビトゥスとしてボランティア行為が出現している様子が描かれている。

第 2 章の課題は、ボランティア行為者の組織における定着過程である。社会運動論のフレーム分析の視角から見ると、ボランティア活動は文化として遂行されているというよう

に解釈できる。すなわち、活動参加者が実際の活動に関わり続ける理由は、活動体が提示している価値や理念、イデオロギーと必ずしも一致しない。社会運動論のいうフレームが参加者諸個人の諸価値をまとめあげ、さらに諸個人がその内面において価値を新たに体系化させて初めて、活動を継続できるのである。

第3章で議論されているのは、ボランティア活動の組織化に伴う個人の変化である。焦点は、個人による価値の内面化の理論化である。活動経験の長さという時間的経過という観点から見ていくと、断酒会の調査からは「価値内在化のプロセス」が取り出され、ごみ処理施設建設反対運動の調査からは活動参加が継続する過程における「価値内在化の深化」が示されて、理論化がなされている。

以上の基礎理論的研究を踏まえて、以下では病院ボランティアの分析が行われる。

第4章において取り上げられているのは、組織維持過程である。Muriel Mellow らの研究および日米ボランティア組織に関する既存研究を踏まえつつ、長野県佐久市の病院ボランティアが(1) 病院組織への適応、(2) 組織的拡張と衰退、(3) 対案の提示という3つの視点から調査されている。その結果、まずは病院側の意向を満たすことが病院ボランティア存続の最も重要な条件となっていた。しかしそれと同時に、病院職員や看護師からの承認調達を試みつつ、病院側に対する対案の提示に成功するか否かがボランティア組織の維持を大きく左右することが示されている。

第5章の課題は、組織変容のプロセスである。Erving Goffman らの戦略論を援用しつつ、札幌市の病院ボランティアが調査されている。既存研究では日本の病院ボランティアは受動的であるという見解が強い。確かに調査においてもボランティア活動に関して病院機構によって作りだされた「制限された状況」が見られた。しかし一方、ボランティア組織は「病院側に認められる範囲内において」最大限活動していく工夫をしている。その際、最も大きな役割を果たすのはボランティア・コーディネーターである。コーディネーターが病院側とボランティア側の調整の役割を果たすことで、ボランティア組織は病院側に対して対抗規範を打ち出しつつ、ボランティア組織内部における意見の齟齬のバランスをとるという二重の戦略を可能とする。その結果、ボランティア組織は変容していくとされる。

第6章では、「制限された状況」に置かれやすいボランティア組織による自律性の復権が論じられている。いかなる戦略によってボランティア組織は自律性を回復・維持できるのであろうか。Elizabeth Graddy と Donald Morgan のモデルを用いて長野市と佐久市の病院ボランティアが分析され、ボランティア行為の自律性が(1) メンバー募集および活動のための教育の主体になれるかどうか、(2) 活動内容の意思決定プロセスに関与できるかどうかで左右されることが示されている。このような自律性の獲得は、病院組織や医療行政の枠組みを超えた「患者のための医療」という対抗規範の創出を可能とするのである。

最終章は本論文の結論である。まず論文全体の問いが確認された後、各章で得られた成果がまとめられている。そして最後に、ボランティア行為者は「動員されている」「受動的である」という考えは一面的であり、より多面的な性格を持つこと、ボランティア組織の自律性と存続性は主に病院側との相互作用のありかたに依存しており、その相互作用はボランティア組織と病院との構造的な位置づけで決まる。そのような構造的な位置を占めるためにボランティア組織は有効な戦略をとりうることを確認され、論文は閉じられている。

学位論文審査の要旨

主 査 准教授 樽 本 英 樹

副 査 教 授 松 岡 昌 則

副 査 教 授 宮 内 泰 介

学 位 論 文 題 名

ボランティア組織の自律性・独立性と継続可能性の考察

本論文は、現代日本においてボランティア組織の定着過程がどのようなものかを論じている。すなわちそれら組織が定着・展開する上でどのような問題を抱えているのかが問題として設定されている。その焦点は、医療・福祉分野において国家・行政主導で導入されたとされるボランティア組織である。特に、複数の地域の病院ボランティア組織を中心に調査がなされ、そこで得られたデータが分析されている。その結果、本論文は当該研究領域における研究成果として次の2点を持つと評価された。

第1に、日本だけでなく先進諸国全般において医療・社会福祉制度の危機が問題化する中、社会福祉制度の維持のためボランティア組織をいかに活用するかという問題は極めて重要な社会的課題となっている。しかし、ボランティア組織がどの程度何をできるのかに関してはまだ研究は進んでいない。社会学におけるボランティア研究は、ボランティアを受け入れる現場の視点から既存の組織・構造内においていかにボランティア労働を活用するかという技術的な問題を論じているか、または市民社会論的な視点から理念的にボランティア活動の是非を問うているかに二分される。さらに、その社会的緊要性にもかかわらず、病院ボランティアに着目した社会学的研究はほとんど進展していない。本論文は日本における病院ボランティアの希少な社会学的研究となっている。特に、面接調査および参与観察といった社会調査の手法によって、当事者である複数の病院と病院ボランティアからデータを取得するという作業を時間をかけて行い、病院ボランティア組織と病院との協調と対立の具体的様相、病院ボランティア組織内でのリーダーとフォロアーの具体的な合意形成過程を示している点は、これまであまり知られていない病院ボランティアの実態と可能性を示している。この意味で、学術的にも社会的にも意義ある成果となっている。

第2に、ハビトゥス論、フレーム分析、戦略論などの様々な社会学理論を検討しつつ駆使してボランティア組織に接近している点が評価に値する。国家・行政主導で立ち上げられた一部のボランティア組織の定着過程には、様々な問題が生じている。その最大の理由は、ボランティア組織を受け入れる側の思惑や期待とボランティア行為者側の活動欲求とのずれによる。

有力な既存研究であるボランティア動員論によれば、ボランティア行為者は国家・行政によって動員され操作され続ける受動的な存在あり、積極的かつ肯定的に語られることは少ない。しかし、本論文の分析によれば、ボランティア組織は様々な構造上の制約の中に置かれながらも、自らの活動欲求と上部組織の活動期待とを巧妙にすり合わせながら、積極的に活動を展開させていく手法を身につけている場合がある。本論文の言うボランティア参加者の「活動経験の蓄積」やボランティア組織による病院側に対する「対抗規範の提示」という理論的含意は、「動員されたボランティア」という既存研究の言説に回収しきれないボランティア組織のあり方を明快に示している。

このように病院ボランティアの動態を記述・説明したことで、それら組織の自律性と存続性の条件にまで迫ることができた点ために、本論文は社会学関連の学会において注目される研究成果となる条件を獲得できている。

以上のように、本論文は病院ボランティアを社会学的視角・手法により分析するという希有な研究となっており、学術的意義を持つ。また、社会福祉制度の維持が社会的課題となっている現在において、社会的意義をも示していると言える。確かに本論文は、個人の自律性と組織の自律性との関係や、組織維持に関する病院ボランティアとそれ以外のボランティアとの差異など、いまだ説明し切れていない点をいくつか抱えてはいる。しかし、これらの点は、今後の学会における議論に委ねられるべきものと判断される。

本委員会は、竹中 健氏により提出された当該申請論文を慎重に審査し、また口頭試問を実施して論旨を質すなど、十分かつ慎重に審議を重ねた。その結果、全員一致して、同氏に博士(文学)の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。